



2020年3月5日

各 位

会 社 名 株 式 会 社 メ ド レ ッ ク ス
代 表 者 名 代 表 取 締 役 社 長 松 村 米 浩
(コード番号：4586 東証マザーズ)
問 合 せ 先 経 営 管 理 部 長 藤 岡 健
(TEL. 03-3664-9665)

日本薬学会 第140年会における発表のお知らせ

日本薬学会第140年会において、当社と徳島大学が共同で実施した研究成果が発表されましたのでお知らせいたします。

◇日本薬学会 第140年会

プログラム集の発行、Web要旨の公開のみ

URL : <https://confit.atlas.jp/guide/event/pharm140/static/notice20200227>

<https://confit.atlas.jp/guide/event/pharm140/static/notice2020022801>

◇当社と徳島大学との共同での発表演題

イオン液体によるインドシアニングリーンの経口吸収性改善の検討

【概要】

経口投与は最も非侵襲的な薬物投与経路であり、自宅で服薬可能であることから、患者さんの体力的・経済的負担を限りなく軽減できる。しかしながら、経口投与で吸収できる薬物は極めて限定的であり、経口吸収性を改善する技術も未だ発展途上にある。そこで我々は、独自のイオン液体技術を応用することで、経口吸収性の低い薬物の吸収性を改善できるのではと考え、イオン液体 (ILs) にモデル薬物として近赤外蛍光性を有するインドシアニングリーン (ICG) を溶解させ (ILs溶解液 (ICG-ILs))、マウスに経口投与した後の全身移行性を *in vivo* imaging systemを用いて評価した。ICG水溶液投与群では、投与1時間後で主として小腸付近でのみ蛍光が観察され、その後は全身に移行する様子が見られないことから、ICGの水溶液は予想通り経口吸収性が低いことが示された。一方、ICG-ILs投与群では、投与20分後から全身での蛍光が観察され、投与1時間後の血清を回収してその中の蛍光強度を測定したところ、ICG-ILs投与群でのみICG由来の蛍光が検出された。以上の結果より、ILsを経口投与製剤の基剤として用いることで経口吸収性の低い薬物の吸収性を改善することができる可能性があることが示された。今後、他の経口難吸収性の薬物でも検討を行い、本技術の普遍性を確認する予定である。

以 上